
第Ⅱ部

「テーマコミュニティ」プロジェクト

甲南大学文学部三回生	神門右妃
甲南大学文学部二回生	原田遼太
甲南大学文学部二回生	合田真由美
甲南大学文学部二回生	澤田由貴
甲南大学文学部二回生	島岡麻衣

1. サブプロジェクトの趣旨と調査概要

1. プロジェクトの趣旨

codeプロジェクトは、2005年で阪神・淡路大震災から10年を経たことを踏まえ、コミュニティやネットワークの方向性を理論・実証の双方から探求することを目的とした実践調査、実証実験を企画しています。

そのうち、このサブプロジェクトでは、神戸市東灘区に存在する様々な地域コミュニティ活動やネットワークを、「テーマコミュニティ」という視点から多角的な調査を行うことを目的としています。福祉の分野では、「本山地域福祉センター」、国際の分野及び子育ての分野では「多文化共生センターひょうご・多文化保育園」、アートの分野では「B・プレイス住吉館ギャラリー」、街づくりの分野では「甲南大学周辺地域の飲食店」といった、主に4つのテーマから、東灘区に存在する人と人とのつながりについてインタビューを通して明らかにしていきたいと思い、この調査を進めてきました。

まず、高齢者福祉への関心から、一般の人が最も利用しやすいと考えられる「本山地域福祉センター」に注目し、実際の活動内容や運営方法を調査し、東灘区の高齢者の方々のコミュニティをみつめてみようと考えました。

次に、震災をきっかけに幅広い分野で行われているボランティア活動に注目し、地域に住む人々と共に運営するコミュニティビジネス、「多文化共生センターひょうご・多文化保育園」を調査することになりました。

そして、東灘区には数多くの美術館が存在します。そのアートにあふれた東灘区の中でも「B・プレイス住吉館ギャラリー」は、より地域に開かれた場所であり、アートという分野で人と人とのつながりをさらに広げる新しいコミュニティであると考え、調査をすることになりました。

また、私たちにとって身近である甲南大学周辺の飲食店を中心に、人と人、また飲食店同士の関係をインタビューによって「カフェ・コミュニティ」は存在するのかを調査しました。

2. 調査概要と作業スケジュール

- 2004年10月：各々の興味のあるコミュニティについてインターネット、パンフレットなどをみるなどして情報収集。実際にどこへ調査に行きたいかを会議して決める。
- 2004年11月：「地域福祉センター」にインタビュー調査
 - ：「多文化保育園」主催のお祭りにボランティアとして参加
 - ：「多文化保育園」へ調査。インタビューの後、テープ起こし、まとめ
- 2004年12月：「B・プレイス住吉館ギャラリー」に訪問・インタビュー調査
- 2005年1月：「甲南大学周辺の飲食店」を訪問・インタビュー調査
- 2005年2月：まとめ
- 2005年3月：まとめ、報告書作成

2. 事例調査

1. 本山地域福祉センター

正式名称	本山地域福祉センター
運営主体	本山ふれあい街づくり協議会
所在地	神戸市東灘区岡本1丁目7-3
Web サイト	なし
事業・活動趣旨	東灘の各小学校区に1箇所ある福祉センターの1つ。誰もが参加できる「ふれあい喫茶」など福祉・交流活動のほか、囲碁や手芸、生け花など趣味のサークル活動を行っている。
調査日	2004年10月12日(火)、26日(火)
調査協力者	
その他特記事項	休館日：日曜・祝日

①センターの運営内容について

本山ふれあいの街づくり協議会が委託運営しており、福祉団体が主となって福祉活動を行っている。そのため地域の自治会は同センターの運営には入っていない。本山地域福祉センターは場所の提供を行っているだけであり、実際には、本山ふれあい街づくり協議会が色々な活動を行っている。具体的な活動内容としては、音楽フェスティバル、ふれあい喫茶、子育て支援サークル、ひとり暮らし高齢者給食教室(月1回)、生きがい対応型デイ・サービスの福祉活動や交流活動、カラオケ、囲碁、手芸、体操、民謡、生け花、フォークダンスなどの趣味のサークル活動を不特定多数の人々を対象に活動を行っている。

②具体的な利用実態について

この地域では不特定多数を対象にした囲碁クラブ、カラオケ部、懐メロの会、フォークダンスなど色々あるが、交通のアクセスが良いので宝塚や西宮から来ている人もいる。しかし、神戸市の税金を使っているため、宝塚や西宮から来る人の分まで払う負担が大きく

なるという問題がある。年間 22000 人くらいの方が本山地域福祉センターの施設を利用している。これは神戸市でトップである。

③運営費用について

本山地域福祉センターのメンテナンス費用は、すべて本山ふれあい街づくり協議会の負担となっている。他の民間委託が入ると営利目的になってしまうので、行っていない。ただし、それだけでは全体の運営が困難なため、神戸市から若干の施設協力金をいただいている。午前中の施設使用料金の例では、一番広いところ（部屋）で 1000 円、狭いところ（部屋）で 500 円を支払ってもらっている。それを少しずつでも積み立ててメンテナンスの費用にあてている。

④広報紙の概要について

広報誌の内容は不特定多数を対象にした、囲碁、手芸、カラオケ、体操、民謡、生け花、フォークダンスなどイベントをPRして、啓発活動として広報誌を配っている。

同誌は、本山第一小学校区域 900 部を、構成団体に所属する 25 人がそれぞれの持ち場をボランティアで配る。1 年に多くて 3 回配る。

⑤行政からの税金で運営を行っているが、行政への要望は？

行政も変わってきており、指定管理者制度もある。平成 18 年までに公共施設は移行され、民間委託になる。

■事例の考察

今回の調査では、本山地域福祉センター以外にも、もう一箇所、本山東福祉センターを訪れたが、運営の状況についてはほぼ同じような内容であった。地域福祉センターといっても、実際に活動をされる方々に場所を貸して、婦人会や老人会が活動を行っているということだ。本山東福祉センターでも、ふれあい喫茶やカラオケ、民謡、手芸、生け花といった本山福祉センターと同じ活動のほか、高齢者料理教室や大正琴を行っている。

神戸市東灘区には 15 箇所の地域福祉センターがあるが、どの地域福祉センターの活動も大きく違いはないようだ。地域福祉センター同士のつながりがあり、それぞれに協力し

て活動を行っていると思っていたが、実際、そのように地域同士、人同士のつながりはない。ここで、どの地域の福祉センターともつながりがあれば、大きなイベントができて、より一層発展した活動が行えるのではないだろうか。

2. NPO 法人・多文化保育園

正式名称	多文化共生センター・ひょうご 多文化保育園
運営主体	特定非営利活動法人 多文化共生センター
所在地	神戸市東灘区深江南町四丁目
Web サイト	http://www.tabunka.jp/hyogo/
事業・活動趣旨	<ul style="list-style-type: none">・ 互いを尊重する「多文化共生」の理念に基づいて、在日外国人への支援、多文化共生に関する調査・研究などのプロジェクトを行う。・ 日本で暮らす外国人にとっては、基本的な人権を保障するサービスが満足に受けられないことは決して少なくない。多文化共生センターは滞日者だけではなく受け入れる側も含め、国籍、文化、言語などの違いを越え、在日外国人と日本人の双方へ向けて「多文化共生」のための事業を創造・実践することを目的としている。
調査日	2004年11月30日
調査協力者	武田真由美さん（園長先生）

①多文化保育園のできたきっかけ

阪神・淡路大震災によって地震の直接の被害に加え、言葉・習慣・制度の違いから、日本人とは異なる困難に直面した外国人被害者も多くいる。こうした外国人への支援を通し

て「多様でない社会」から、「多文化共生社会」の実現を目指していく中で多文化共生センターが立ち上げられた。園長である武田さんは、元々外国人支援で活動していたが、深江の方の知り合いの紹介で子育てに悩み困っている外国人の親の話を聞き、多文化保育園というものの必要性を実感し、それが設立するきっかけであったという。

②多文化保育園の現状

2001年3月に始まり、始めは園児ふたりという大変小規模なものであったが、次第に園児も増え、今では約20名前後となり、教室を2クラスに分けている。深江という地域は定住外国人が多いということから、ブラジル、アルゼンチン、フランス、韓国、そして日本など多様な国籍の子どもたちが集まっている。話したり、教えたりするのは日本語ではあるが、いろんな国の母国語で歌を歌ったり、英語の絵本を置いていたり、それぞれの文化をととても大切にしている。

また、この多文化保育園は誰にでも利用しやすいように保育料をできるだけ低くしているが、無認可保育園ということで公的な補助がないために、地域の方やボランティアの方など多くの方々の支援によって成り立っている。

③行事について

普段から、自分たちのもつ言語・文化を大切にするということは意識し、遊び・音楽・教材・料理などの日常の保育を含め、月ごとの行事でも工夫して取り入れている。行事は七夕、節分、運動会、世界のパンを食べよう、フェスタジニーナなどそれぞれいろんな意味で取り入れられている。

フェスタジニーナというのは、ブラジルの田舎の方のお祭りで、テーマは「結婚式」である。ぼろぼろの服や麦わら帽子などをかぶった新郎新婦が主役で踊って、子どもたちも周りでひらひらの田舎風ドレスとジーパンに穴が開いたような感じの衣装で踊るというもの。また、世界のパンを食べようなどのように保護者の方に来てもらい、自国の料理を紹介してもらって、一緒に作るということも取り入れている。このような行事からも、それぞれの文化の素晴らしさを実感し、お互いの文化を素直に受け入れていける豊かな心の成長につながっている。

このような行事の予定については、大体一年ごとに前もって大きな流れを決めている。一年通しての目標のメインや全体の兼ね合いは決めておいて、行事の中身については毎月

一ヶ月前に決めている。子どもたちは、基本的に何に対しても好奇心が大盛で何をやってものめりこんでいく。だからいろんな経験をさせてあげたいし、子どものメンバーの年齢層や子どもの興味に合わして考えるようにしている。

④ 日常の保育園の生活について

場所が小さく庭がなく、外で自由に遊ぶ場所がないため、毎日近くの公園まで散歩に行くようにしている。公園では、走ったり登ったり遊具を使ったり、また縄跳びしたりしている。子どもは、運動をだいたい幼児期に習得して成長するので、計画してやるようにしている。運動をする時間や英語やひらがなを覚える時間も必要だが、自由に遊ぶ時間が少なくなってしまうとよくない。散歩、ご飯、昼寝などをしていると、一日はあつという間だという。子どもが帰る時間は、5時から6時くらいが一番多い。そんな中でいろんなことを組み入れていくのはとても大変だが大切なことである。

⑤ 他の団体との関わりについて

・大阪の多文化共生センターについて

大阪の多文化共生センターには多文化保育園はない。大阪では大阪独自の活動をしていて、保育園はこの「多文化共生センター・ひょうご」を拠点としている。二つの共生センターは NPO 法人なので、組織としては一つになっている。運営に関しての基本的な決定は理事会でしているが、一つの拠点の事務局から一人は理事に選出されて、各拠点の意見が反映されるようになっている。拠点同士の人が行き来もしている。

・にこにこ会について

活動としては、スペイン語母教室や、日本語・教科支援教室というように、子どもたちや親も含め、外国人の学習に対する援助をしている。この「にこにこ会」は、多文化共生センターとは全く独立したグループで、「にこにこ会」の運営委員や理事会に準ずるものがあり、運営上での多文化保育園との関わりは特にはない。しかし、やはりこの地域に住んでいる保育園の子どもたちに活動しているという点で、是非何とかしたいという思いから今回のお祭りなどの場で一緒に活動をしている。

⑥ 募集について

・園児の募集について

あまり大々的にはやっていないが、ホームページやパンフレットなどは出しているの、それをもとに訪ねてくる人がいる。また、近隣の深江浜に工場があるので、そこで働いているスペイン語圏や、ブラジルの人がこの保育園のことを口コミで知って訪ねてくることもある。

・ボランティアの募集について

常にホームページやパンフレットなどで募集はしている。ボランティアさんは本当に必要だが、ただあまり多く来られても、子どもの情緒が不安になってしまうという問題もある。すぐ辞めてしまう人もいるから、やや厳しめのオリエンテーションをやって、それから始めるかどうか判断してもらおう。ボランティアさんにやってもらう仕事は裏方がほとんどで、子どもの成長を支援する通訳にはすぐにはなりにくい。普段、成長の支援という面で子どもと関わっていくことは先生がすることになるので、ボランティアの方には、先生の手の回らないところを助けてもらっている。

⑦お祭りについて

2004年11月14日に多文化保育園のお祭りがあるということで、私たち調査メンバーも一緒に参加させていただきました。子どもたちは民族衣装を着ていて、みんなで前に並んで歌や踊りなどの発表などがあったり、ダンスや手品のステージがあったり、いろんな遊びを紹介したりと盛りだくさんでした。そして最後は参加者全員でサンバを踊って盛り上がるという感じで、とてもいい雰囲気です。みんなが楽しんでいました。私たちも一緒にお店の手伝いをさせていただいたり、ダンスや歌を見させていただいたり、大変楽しませていただきました。以下は、そのお祭りに関連する内容です。

・お店について

お祭りには、多くのボランティアの方々や子どもたちの保護者の方や身内の方、児童館に出入りしているおもちゃを作る方などが参加し、自国の料理や遊びなどを出展していた。お店は韓国、ペルー、フィリピン、インドなどそれぞれいろんな国の得意とする料理を出し、児童館のおじさんが自由に木を組み合わせて作るようなおもちゃを披露するなどがあった。

・お店の方と多文化保育園のつながり

フィリピンのお店の場合、フィリピン人のグループを作っていて、そのグループのリーダー的存在であり、昔から多文化保育園とお互いに助け合っている人が出店していた。その方は、多文化保育園に直接関わっているわけではないが、園長先生である武田さんと昔から友達感覚の付き合いが続いていたので、是非参加してほしいという依頼を受け、ボランティアとして快く引き受けたということである。

また、サンバを踊った方は、元々「多文化共生センター」で様々な子どもの支援活動を手伝ってもらったり、子どもの勉強グループをやってくれたり、という関わりが何年もある方で、ボランティアで多文化保育園のイベントにもよく参加されている。

■事例の考察

多文化保育園では、国境を越えたつながりから生まれてくる多様な文化に関わることで、個性や、自己主張の大切さ、さらに相手を理解していくことを学べるのだと感じた。さらに規模の小さい幼稚園だからこそ、より深く、よりよい関係が作れるのではないだろうか。大きくて施設が整っていて多くの子どもたちが集まっても結局、内容や質の低下になりかねない。しかしこの多文化保育園はものや場所はなくても逆にこの地域や環境がプラスになっているのだと感じた。今の子どもたちにこそこのような人との深いつながりが必要なのではないだろうか。

3. B・プレイス住吉館ギャラリー

正式名称	B・プレイス住吉館ギャラリー
運営主体	同上
所在地	神戸市東灘区住吉東町五丁目
Web サイト	http://www.b-place.or.jp/ http://gallery.or.tv/
事業・活動趣旨	若手作家の発表の場、又、地域の人々の交流の場を目的としている。

設立年	1999年12月
調査日	2004年12月
調査協力者	木村早苗さん、栗田隆さん、溝口恵子さん、川口あつこさん

■インタビュー協力者のプロフィール

- I. 木村早苗さん：JR住吉駅前ビュータワー住吉館1階にオープンした国際交流ギャラリー「B・プレイス住吉館ギャラリー」の担当を勤める。
- II. 栗田 隆さん：滋賀県甲賀市で信楽焼の工房「CRAY STUDIO くり」を経営している。
- III. 溝口恵子さん：くらしの京都、ギャラリー楽布陶（らふと）、伊丹市立工芸センター、コルトン koruton などにフェルトで作った作品を展示している。他にも個展を開いたりテレビ出演など広く活動をしている。
- IV. 川口あつこさん：ジュエリーの個展を数多く開くジュエリーデザイナー。B・プレイス住吉館ギャラリーで溝口さんと二人展を開く。

■木村早苗さんインタビュー

①活動のきっかけと経緯について

震災後、駅前再開発を住宅公園が担当。その一環としてアートに関する街づくりをB・プレイスが請け負い、彫刻や絵などを海外や関西の若手芸術家につくってもらうようにプロモートする。

②住吉のギャラリーを選んだ経緯について

- ・ 県の共有地で、ギャラリーとして使うことになった。
- ・ 酒の有名な灘であるので、酒のギャラリー、アートとして始めた。

③ギャラリーのこだわりについて

- ・ 作家との交渉の中では、厳しくする。見栄をはずらず、本音でぶつかる。
- ・ ポストカードやステーションナリーの多い雑貨屋さんとは違い、ギャラリーとして一線をひき、手作り、オリジナリティーを大切にする。
- ・ 気軽に入れる雰囲気もいいが、敷居を低くして誰でも入ってほしい訳でない。

- ・ ギャラリーの運営自体は難しいが、他がやっていない難しいことをいかに続けていくかが大切。

④ギャラリーの内容について

- ・ 陶器、フェルト、クリスマスアート、ドールハウス
- ・ 収益なしで音楽会（琴など）を開くこともある。
- ・ 学生にギャラリーを半額で貸して、展示や発表できる場を与えることもある。

⑤イベントの方向性の決定について

- ・ 木村さん自身が、いろいろな人から助言を得ながら常に考えて決めている。
- ・ 年齢層別に何に興味があるのか考えている。派手なもの、クラフトやアクセサリーは特に受けが良い。
- ・ 動いて見なければわからない。動くことによって次の展開を得られるので作品が売れなくても、次につながれば良い。
- ・ 1年間のスケジュールは半分ほど決めておき、その他は、急に入るイベントのために空けておく。イベントがない時は、ギャラリーのもつ絵などを展示する。

⑥客層について

- ・ 通りがかりの40～50代が圧倒的に多い。特に主婦が多い。
- ・ 東灘区役所や生活文化センターの帰り道に寄る人が多い。

⑦今までで1番好評だったイベントについて

北海道の銅製品（オルゴール、壁掛け、フック、アクセサリー、北海道らしい動物をモチーフにしたもの）の展示が好評であった。

好評であった理由としては、手作りのわりに安く、値段のわりに見栄がよいという点がある。実用的で、アートらしくオリジナリティがあったから。また、いろいろな要素が集まり、品数が多い点も好評だった。

⑧ギャラリーを運営するにあたっての困難について

- ・ 企画していても結果につながらないこと。失敗して結果が出ないことはギャラリーの

責任となる。

- ・ 結果が出ているかどうか見極めが難しい。
- ・ 個展をやるかどうか迷うとき。どれもやってみなければわからないということが一番困難。その分うまくできたときのやりがいは大きい。やりがいとストレスは紙一重。

⑨地域の人々の反響について

- ・ 通りがかりに良く見えるところで、大概の人は興味をもって覗くが、少し入りにくいと感じている人もいる。これは今後の大きな課題である。
- ・ ギャラリーの移り変わりを楽しんでいる人もいる。

⑩ギャラリー運営を通して得たことについて

- ・ 海外の作家と接することによって英語のスキルがあがる。使える英語が学べるという点は勉強になった。
- ・ いろいろな人と出会って、いろいろなことを学べて、たいへん自分のためになること。

⑪ギャラリー運営で大切なことについて

- ・ お客さんと作家のバランスを考えること。
- ・ 地域の一部であり、本社の一部であり、作家の発表の場所のバランスを保つこと。

■栗田隆さんインタビュー

①個展を開いた経緯について

当時会社員であった栗田さんは、特に以前から焼き物に興味を持っていたわけではなく、知り合いの紹介により大阪で焼き物を始めたのがきっかけであった。当時は、それによる収支はほとんどなかったが、数人の人に興味を持ってもらい、お客さんと親密な関係になればよいと考えていた。

現在、独立して5年。知り合いに相談してギャラリーで個展を開くことになった。普段は滋賀県の信楽町でお店を開いている。

②B・プレイス住吉館ギャラリーを選んだ経緯について

元々陶器をやっていたギャラリーの方が偶然お店に入ったことから個展の話に発展し、

見に行ったところ、その雰囲気や立体的な空間の内装を一目で気に入り、初めて自主的に個展を開くことに決めた。

③来客者の反応と意向について

- ・ 住吉のギャラリーは人通りが多いため、主に通りかかりの人がふらっと寄ってくる。ギャラリーの移り変わりを楽しんでいる人も多い。
- ・ 定期的に来てくれるお客さんにはいつもの店にはない新しいものを個展で表現したい。
- ・ 初めてくるお客さんには自分のカラーをだしてその雰囲気を感じてもらいたい。

④個展を開くことの利点や難しさについて

- ・ お店だけの経営は楽だが、発展の可能性は低い。個展を開くことによって広げられる。
- ・ 通りかかる人に見てもらって、再びお店に足を運んでもらうこともある。
- ・ 毎回新しいものを作ったり、その時々違ってくるので、その都度の加減、工夫、判断が難しい。これは長年の経験と知恵が必要になってくる。
- ・ 精神的に嫌になることはないが、作品づくりに関しては、夜遅くまで作らなければならなかったりと体力的には厳しい。

⑤焼き物の制作時期について

- ・ 特に決まっていないが、10月、11月が良く売れる。よく売れて在庫がなくなると作らざるを得ない。
- ・ 信楽焼きのお店の方は、やはり冬にお客さんが少なくなるので、主に冬に個展を開いている。

■溝口恵子さんインタビュー

①個展を開いた経緯について

もともと紡績関係の営業をしていて、フェルトは趣味でやっていた。震災をきっかけに、色々なしんどい経験などをするなかで、悩んでいる暇があれば1日1日を大切に楽しく生きたいと思うようになり、自分がやりたいことを必死でやりたいと思って本格的に始めた。

初めはお店に卸したりだけで個展はやってなかったが、ネットで見た木村さんから声をかけていただき個展を開くことになった。

②活動内容について

- ・ テレビに出て紹介
- ・ フェルトでテントを作って客をひきつけて、中で一緒に作ったりして広めるといったフェルト教室（クラフトイベント）
- ・ 個展

③ギャラリーの利点について

- ・ 外から良く見え、たくさん並べられるので見やすいということ。

④来客された方に与えたいものについて

- ・ 以前は個性を重視していて、お客さんの目を引きたいと思ってやっていたが、今はお客さんの心を打つものを作っていきたいと思っている。すごく暗い気持ちで入ってきたお客さんが自分の作品をみることで明るい気持ちになって「いい気持ちになった」と言って帰って欲しい。
- ・ もともと木や花が好きで、木の魂の「やわらかい光」のような明るいイメージを特に意識している。

⑤フェルト作品の作成を通して得たものについて

自分が必死でやっていると、本当に色々な人が助けてくれるし、本当に自分が好きで楽しいと思ってやっているから楽しい。

⑥オリジナリティーの作り方について

人の作品は見たくないので見ない。人の作品と比べたくないし、たくさん見ることによって自分が作る必要があるのか、などとネガティブな気持ちになったり、ショックを受けたくない。あくまで参考とするのは古いものであったり、自然の植物である。いつも平常心でいることによって自分らしさを表現したい。

■川口あつこさんインタビュー

①ジュエリー作成の活動と経緯について

- ・もともと作るのが好きで、趣味でやっていた。平面ではなく、立体的なものに興味があって建築会社に勤めていたがプロとしてジュエリーをやりたくて仕事をやめて本格的にやり始めた。
- ・特に何かに影響を受けたとかではなく、とにかく作りたいていうのがあり、まわりのアクセサリとかだけではなく、普段の生活の色々なものから刺激を受けて吸収している。

②B・プレイス住吉館ギャラリーを選んだ経緯について

- ・空間が広く、他のギャラリーと違って個性的な雰囲気がとても良く、このギャラリーを選んだ。

③フェルト作家溝口さんとのつながりについて

もともと友達で、やり始めたのが一緒。彼女の色使いがきれいで映えるので、たまに一緒に展示を行っている。

④客層について

- ・ 20歳後半～30歳代の主婦の方が多い。
- ・ このギャラリーに話をしに来られる年配の方も多。

⑤来客者の反応について

- ・ 珍しさ、かわいらしさ、春っぽい色使いに魅かれ、よく買われるようだ。
- ・ 主婦の方の場合、家でも子どもがいても作れるので、作り方を聞いてこられる方もいる。

⑥個展の魅力につて

お店だと店に合わせて作るが、個展は自分のやりたいように自分の色を出すことが出来る。

⑦作品を通して来客者に感じてもらいたいことについて

こういうアーティストの方々は元々儲けようという考えではなく、本当に好きでやって

いるので、見てもらう人に喜んでもらったり、こんなものを作りたいと感じてもらえること。

⑧今後の作品の方向性について

やっていくうちにどんどん自分流のオリジナルのやり方を編み出していくが、もっと自分なりの技法を見つけていきたい。

■作品をみて

素朴でシンプルなアクセサリが幅広い年齢層に受け入れられるものだと感じた。また、溝口さんと二人展では、個性的でカラフルなフェルトの作品の中でお客さんの目を休ませるような、見る者に安らぎを与える作品であった。



写真1. 溝口恵子さん・川口あつこさん二人展の様子

■事例の考察

「B・プレイス住吉館ギャラリー」は、開かれた敷居の低いギャラリーを目標としている一方で、(例えば、冷やかしのように) 誰もが入っていいというわけではなく、あくまでギャラリーとしての品位を落とさず、なおかつ地域の交流の場を目的としている。インタビューを通しB・プレイスの強い信念を感じることができた。

地域の交流の場としてはどうだろうか。一般的に言えば、地域の交流の場というものには様々な人が訪れるはずである。しかし、ギャラリーとしての品位を維持することを考えると、多くの人にとってはおのずと敷居が高くなってしまいうだろう。そうした場が、地域の交流の場と言えるのかということを考えさせられた。雑貨屋のように手軽なものにして

ギャラリーという敷居を失くしたくない。品位は落とさず、開かれた地域の交流の場を作り上げることはいかに困難なことかが分かる。

しかし、ギャラリーという場はそこを通る人の心をふと暖かくしてくれる癒しの場であり、ものを通して自分を表現し、またその思いが見知らぬ人に届く心のキャッチボールのようでもある。通りがかりにふと目にする作品は落ち込んでいる時には心に響く暖かいものに吸い込まれ、中に入ると飲み込まれるような雰囲気、見ている者に感動を与えたり、自然と明るい気持ちにさせる不思議な空間だった。その暖かい雰囲気の中で楽しい会話ができ、お客さんとギャラリーの素敵な出会いやつながりが生まれるのだと感じた。

そして、B・プレイス住吉館ギャラリーのもう一つの目的は、若手作家の発表の場としてしている。今回紹介した栗田さん、溝口さん、川口さんは3人とも若手の作家である。どの作家も自分のペースを大切にし、必ずしもビジネス性を重視した作品は求めず、何より個性を大切にしているそうだ。利益を重視しないという姿勢に芸術家としての信念を感じさせられた。

4. 甲南大学周辺エリアの飲食店 ～カフェを中心に～

名称	甲南大学周辺エリアの飲食店（喫茶店A, B, C)
運営主体	個人
所在地	神戸市東灘区岡本三丁目
Web サイト	なし
事業・活動趣旨	飲食店
調査日	2005年1月
調査協力者	喫茶店A, B, Cの各店主

■インタビュー協力者のプロフィール

今回は、甲南大学付近の同じ通りにある個人経営の喫茶店A, B, C, について調査を行った。各店の概要は以下の通り。

I. 喫茶店 A：自家製ドイツ風シチューが自慢のカフェ・レストラン

II. 喫茶店 B：こだわりのエスプレッソが自慢のイタリアン・バー

III. 喫茶店 C：インターネットが使えるインターネットカフェ

なお、この通りにはかつて 20 店舗ほどの商店街があったが、今ではほとんどの店が閉店しており、今回の 3 軒の喫茶店はその商店街には属していない。

■喫茶店 A：自家製ドイツ風シチューが自慢のカフェ・レストラン

<経緯について>

①歴史

1975 年、阪急園田駅付近で喫茶店として現在のオーナーの母親が開業。数年後、岡本駅前に移転。移転後に一度ブティックになる。2000 年、現在の甲南大学付近に移転。再び喫茶店として現在のオーナー夫婦が経営する。

②他店とのつながり

あいさつ程度であまりない。新しくできた店とも現在は特に関わりはない。

③通りの状況（商店街とのつながり）

昔は商店街があり、たこ焼き屋、居酒屋、団子屋などもあった。しかし高齢化のためにほとんどの店が閉店してしまう。移ってきた当時、商店街がつぶれてビルになるという話も出ていたが、反対意見も多く、いつの間になくなってしまっていた。

現オーナー夫婦は、商店街とのかかわりにあまり積極的ではない。行事や会費などといった面倒なことが多いため、出店して間もない頃から、すでに商店街との交流は薄くなっていったという。

④通りへの希望

特に盛んにしようという気持ち強いわけではない。むしろ、今の雰囲気や常連さんとのつながりを大切にしたい。

<運営について>

①客層

常連さんが圧倒的に多い。また、常連さんを大切にしたい（甲南大学の教員や事務員、学生がメイン。また近くの幼稚園に通う子どもたちの保護者）。学校行事の日（資格試験の会場などで使用されている日）は、かなり多くなる。

②宣伝状況

広告や宣伝はお金がかかるのでしていない。莫大なお金をかけてまで広告を出そうとは思わない。取材の申し入れがあった場合は引き受け、広告を出す。グルメ本に過去に何回も取り上げられてきたので、それを見てくるお客さんもたまにいる。

■喫茶店 B：こだわりのエスプレッソが自慢のイタリアン・パール

<経緯について>

①歴史

コーヒー好きがこうじて脱サラして、コーヒーを研究・開業。本場イタリアにもエスプレッソを学びにいった。

②他店とのつながり

現在はあまりない。喫茶店Cの主人と話すことがあるが、喫茶店Cはアメリカ式であるのに対し、喫茶店Bはイタリア式。根本的な考え方や目指すものが違うので、それぞれがそれぞれの方向性でやった方が良いと感じた。ゆっくりとした雰囲気、コーヒーの専門性を追求したい。

③通りの状況

盛んにしようという意見もあるが、このままの雰囲気が良いという反対意見もある。何でもお店が並べばいいというわけではなく、それぞれのこだわりを持った専門的なお店が並べばおもしろいと思う。また、似たようなお店が並んでも仕方がないとも思う。

<運営について>

①客層

岡本近辺の主婦層や、近所のおじいさん・おばあさんがメイン。甲南大学生や、ロコミで聞いてくるエスプレッソ好きな人も。

②宣伝状況

広告をあえて出さない。ロコミだけでどこまで広がるかをこだわりたい。以前に一度広告を出したが、たくさんのお客さんが入りすぎて今までの常連さんに迷惑がかかるのでやらないほうが良いと感じた。エスプレッソの専門誌などには出したい。

■喫茶店C：インターネットが使えるインターネットカフェ

<経緯について>

①歴史

飲食関係の仕事を辞めた後、2004年12月に自宅の土地を改装して開業。

②他店とのつながり

オープンして間もないので、現時点ではまだつながりはない。

④通りへの希望

閉業している店が多いので活気がない。自分だけで盛り上げるのは難しいので通り全体でもっと盛り上げられたらと思う。

<運営について>

①客層

出勤前に寄ってくる男性の会社員の方が多い。甲南大学の近くなので学生も多い。

②宣伝状況

なるべくたくさんの人に知ってもらいたいので大々的に宣伝をしたいが、広告にかかる費用は大きく、広告を出すことは難しい。

■事例の考察

印象的だったのは、喫茶店A、喫茶店Bのマスターが人と人とのつながりの深さ大切にしていたことだ。ただ、たくさんのお客さんが必要というのではなく、いつも楽しみにきてくれる常連さんを何より大切にしている温かいつながりに気付くことができた。

全国的なマスコミにも頻繁に紹介され、人通りの多い近隣の岡本商店街に比べ、少し外れたところにあるこの通りは、甲南大学が近いにも関わらず人の行き交いはあまり見られない。また、店の入れ替わりや競争が激しい岡本商店街に比べ、この通りは入れ替わりもほとんどなく、閉業してもそのままにしている店が多い。もちろん、閉業したからといって新しい店を出せばいいわけではない。この通りの店は、店でもあり、住居でもあるからだ。

インタビューを通じてわかったことの一つは、この通りも昔はにぎやかで栄えていたということだ。時が経つにともなって経営者も年を取ってしまい、今では経営を続けることが難しくなり、今の状態にあると言う。その中で通りに新しい店ができた。「インターネットカフェ」という新しい響きにこの通りの再生化が図られるのかと期待した。実際にインタビューを行ってみると、通りを盛り上げたいという一方、この雰囲気を変えたくないという意見もみられた。今回訪ねた3店の喫茶店は、交流が全くない店同士であっても、お互いのことは気にしている様子であった。既に顧客のついでに喫茶店と、新しく開業し今とはとにかくお客さんをつけたい喫茶店。また、味のこだわりとはやりのインターネットでは、やはり方向性も異なってくるのは仕方のないことなのかもしれない。同じ通りでも考え方は様々であることを実感させられた。きっとこの3店以外にも色々な経営方針があるのだから、こうしたそれぞれの個性を活かしつつ、ひとつの街並みを作っていくことの難かしさがる。

通りを外から眺めている人が立ち入るようになるということは、そんなに簡単なことではない。

3. まとめ

本サブプロジェクトは、以上の 4 つの事例を調査してきたが、その間、「コミュニティとは何か？」という事を深く考えさせられた半年間だった。試行錯誤の上、できるだけ広い分野を調査してきたつもりだが、どの分野にも共通していることは、人と人とのつながりを強く意識しているということだろうか。それぞれの仕事や活動はまったく別物だが、外国人の子どもたちを支援することや常連さんを大事にする、といったことに大きな違いは感じられない。どちらも出会いを大切にし、関係を絶やさないように努力している点では一緒だ。積極的なコミュニケーションが、コミュニティを形作っている。今回、自分たちがインタビューに赴いた先でも色々な出会いがあり、これが広がっていく事でコミュニティが作られていくのだと改めて実感した。多文化保育園や住吉のギャラリーのように、震災がきっかけで新しいコミュニティが生まれるのも面白いと思う。

調査の中では、色々な場面で閉鎖的だと感じた部分もあった。それは、コミュニケーションを広げていかなければコミュニティにはならないが、あまり大きくなりすぎても收拾がつかなくなる、といったコミュニティのある種ジレンマ的な側面なのかもしれない。

最後に、課題としては、調査対象を絞る上での問題意識ははっきりさせておくべきだと感じた。インタビューなどで何を聞くべきかわからなくなったり、どこに行くべきかでかなりの時間を費やしたからだ。この問題は、今後修正していきたい。

謝辞

この調査には、多くの方々のご助力をいただきました。心から感謝申し上げます。この報告書作成のためインタビューに答えて下さって私たちにさまざまなことを教えて下さった本山地域福祉センターの方々。お祭りにも招待して下さった、特定非営利活動法人多文化共生センター・ひょうごの武田真由美さん。突然の訪問も快く受けて下さったB・プレイスの木村早苗さん。素晴らしい作品を見せて下さり、さらにインタビューに答えて下さった栗田隆さん、溝口恵子さん、川口あつこさん。お話を伺っただけでなく素晴らしい料理を出してくれた甲南大学周辺の飲食店のオーナーの方々。みなさん、ほんとうにありがとうございました。

最後に、調査全般にわたってご協力いただいた甲南大学文学部社会学科の宮垣元助教授。社会学研究室の笹村律子さん、榎原利依さん。事務的なことはもちろん、精神的にも私たちを支えて下さいました。ほんとうにありがとうございました。

参考文献・資料

- ・ 多文化保育園 HP <http://www.tabunka.jp/hyogo>
- ・ B・プレイス HP <http://gallery.or.tv>
- ・ 栗田隆さん HP 「CLAY STUDIO くり」 <http://www.biwa.ne.jp/~t-kurita/>
- ・ 溝口恵子さん HP <http://blogs.dion.ne.jp/mizoweb/>